=特集=

キャリア教育の視点による個別の教育支援計画における「本人の願い」の把握及び支援の充実を図るためのツールの開発と試行

大　崎　博　史

（教育研修情報部）

要旨：キャリア教育の中核である「本人の願い」に基づく支援目標および内容，方法を検討するためのツールである「本人の願いを支えるシート」を開発した。

本シートの試行により，関係者が，対象の子どもの願いをとらえ，その支援の在り方について考えた。

その結果，個別の教育支援計画と組み合わせることによって「本人の願い」を把握することの大切さを再確認することができた。さらに，複数の支援者がシートを作成することによって，「本人の願い」への支援を共有し，キャリア教育における「本人の生き方」への支援を改めて考えることができた。その他にも，本シート活用のメリットとして、シートの積み重ねによって経年的にその人が歩んできたキャリアを考えることができる等が考えられた。

今後、個別の教育支援計画において，「本人の願い」を複数の目によってとらえることにより，より「本人主体」の支援の一層の充実を図るための方策を検討することが望まれる。

見出し語：キャリア教育，本人の願い，個別の教育支援計画，PATH，本人主体

Ⅰ．はじめに

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（2004）では，「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くことの関係付けや価値付けの累積」として定義づけている。

具体的には，中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）」（2010）でも述べているように「人は，他者や社会とのかかわりの中で，職業人，家庭人，地域社会の一員など，様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は，生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり，つながっていくものである。」とし，人は人生の中で様々な役割を担って生きており，その役割はその時々によって変化し，人によっては複数の役割を担いながら，それらが連続してつながっていることを示している。

また，同審議経過報告（2010）では，「このような役割の中には，所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが，人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し，取捨選択や想像を重ねながら取り組んでいる。人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分の役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが『キャリア』の意味するところである。」としている。

これらのことから，その人にとっての「キャリア」は，主体である自分が，自らの役割をどのように捉え，自分と関連付けるのか，そして自分の役割をどのように価値付けるのかといったことの積み重ねであることを示している。すなわち「キャリア」はこれまでの経験を踏まえた本人の価値観や自己決定によるものであると言える。

また，Super（1980）が示した「ライフキャリアの虹」における各役割に対する個々人の比重の置き方は，その人の価値観や社会的要因によって自己決定されるため，個々人によっても異なり，個別性があり，多種多様な側面を持っている。さらに「キャリア」は単なる連続ではなく，これまでの自分をどう活かすのか，今後，自分がどう進むのかといった将来展望を含むものであることからも，「キャリア」はこれまでの自分を活かした現在における自己決定だけでなく，将来に向けての自分の「ありたい」,「なりたい」といった「本人の願い」を含むものであると言える。

このようなことから考えると，本人の価値観や自己決定，将来展望が大きく関係する「本人の願い」は，まさに「キャリア」の中核であると考える。

では，この「キャリア」はどのように育まれるのか。

同審議経過報告（2010）では，「このキャリアは，ある年齢に達すると自然に獲得されるものではなく，子ども・若者の発達段階や発達課題の達成と深く関わりながら段階を追って発達いくものである。このような発達を促すには，外部からの体系的・組織的な働きかけが不可欠である。学校教育では，社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力や態度を育成し，一人一人の発達をうながしていく必要がある。このような教育が『キャリア教育』である。」としている。

このことからも，「キャリア」の中核である「本人の願い」を育み，支援するためには，自身の内発的な動機付けだけでなく，外発的動機付け，即ち外部からの体系的・組織的支援が必要であると考える。

ところで，障害のある本人への実際の支援としては，今日の特別支援教育制度の下では，個別の教育支援計画の作成に基づく支援が行われている。

個別の教育支援計画の作成が提言されたのは，平成15年3月の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（2003）であるが，この最終報告では，「障害のある子どもを生涯にわたって支援する観点から，一人一人のニーズを把握して，関係者・機関の連携による適切な教育的支援を効果的に行うために，教育上の指導や支援を内容とする『個別の教育支援計画』の策定，実施，評価が重要。」と述べている。

本研究では，キャリア教育の中核である「本人の願い」を基にした支援目標や支援内容を検討するためのツールである「本人の願いを支えるシート」を開発した。この「本人の願いを支えるシート」は，個別の教育支援計画に取り入れることによって本人の願いに基づいた本人主体の支援を充実させることを目的としている。

本稿では，「本人の願いを支えるシート」の概要と作業手順，活用の実際について報告する。

Ⅱ．研究協力機関における個別の教育支援計画の分析から

ここでは，「本人の願いを支えるシート」を開発するに至った，個別の教育支援計画における「願い」欄の現状と課題について報告する。

１．目的

本研究の研究協力機関における個別の教育支援計画の中の「願い」欄の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

２．方法

本研究の研究協力機関のうち，特別支援学校５校の個別の教育支援計画を収集し，「本人の願い」欄の有無とその記述内容について分析した。

分析対象は，表１の通りである。

３．結果と考察

本研究の研究協力機関である特別支援学校の個別の教育支援計画を分析した結果，以下の現状が明らかになった。

１点目に，５校全ての個別の教育支援計画の中に「願い」欄を設けていたが，うち，１校については，小学部，中学部の個別の教育支援計画には「家族の願い」欄はあるが「本人の願い」欄を設けていなかった。この学校は，高等部になってはじめて「本人の願い」欄を設けていた。

表１　研究協力機関における「個別の教育支援計画」の分析対象とその数

A 校	小学部：6人，中学部 6人，高等部 9人分
B 校	高等部：29人分
C 校	小学部：13人，中学部 6人，高等部 6人分
D 校	個別の教育支援計画の様式のみ分析
E 校	サンプル数は不明

2点目に，「本人の願い」欄が設けられていても，実際には，「本人の願い」が「保護者の願いと同様」となっていたり，具体的に記述されていなかったり，または「本人の願い」になってない記述がみられた。

5校中，実際に記述された個別の教育支援計画のサンプルを提供してくれた3校からは，この点について次のような記述もみられた。

- 障害の状態により，本人の意思の確認が困難であるため,「保護者の願い」と同様である。(小学部)
- 好きな場所でのんびりと自分のペースで遊びたい。(小学部)
- 自ら将来を見通して判断するまでには至っていない。(中学部)
- 国語の学習をがんばりたい。(高等部)
- 卒業しても母と買い物に行きたい。(高等部)

3点目に，「願い」として記述されているが，その「願い」はどの時点の願いであるのか等の時間的位置付けが統一されていない学校もあった。このように，時間的な位置付けが統一されていないことにより，「願い」を支えるための支援計画があいまいなものになる可能性があることが推測される。この点について，次のような記述もみられた。

- 好きな音楽を聴いたり，戸外でゆっくり過ごしたりしたい。(小学部)
- 幼稚園の先生になりたい。(中学部)
- 一人旅をしたい。(高等部)
- 本をたくさん読みたい。(高等部)
- 国語の学習をがんばりたい。(高等部)
- 卒業しても母と買い物に行きたい。(高等部)
- 自分でできることを増やす。(高等部)

4点目に，「本人の願い」欄には，就職先等の学校卒業後の「場」について記述されていることも多かった。特に，高等部の生徒の記述にその点が多くみられた。具体的には，次のような記述がなされていた。

- 卒業後は○○○内の服飾店で働きたいと考えている（高等部）
- ○○学園で農業をしたい。(高等部)
- ○○の自立支援ホームに入り，週末は家に帰るような生活でも良い。(高等部)
- ○○○で働きたい（高等部）

以上の結果から，個別の教育支援計画に「本人の願い」欄が設けられているが，この欄の活用の仕方の難しさならびにキャリア発達の視点からの記述の工夫の必要性を感じた。

具体的には，「本人の願い」が就職先等の学校卒業後の「場」について記述されていることが多い点については，ライフキャリアの視点も含めた，人生の様々な役割における本人の「願い」についての把握が必要であると考えた。

また，「本人の願い」が具体的に記述されていな

い，または「本人の願い」になってない，に関しては，前述のとおり，小学部，中学部において「自分で考えるまでには至っていない。」と記述されたものが多くあった。そして高等部になってはじめて，進路に関することや，余暇の充実に関すること，夢などが記述されるようになってきたが，「本人の願い」は学校を卒業するときになって初めて表現できるものなのか疑問に思った。

さらに，本人が音声言語によるコミュニケーション手段を有しているか否か等によって，「本人の願い」や学習上や生活上の困難さについての把握が難しいという課題も感じた。実際には，その際，可能な範囲で本人からの聞き取りを実施したり，保護者と個別の教育支援計画作成時に面談をしたりすることによって「本人の願い」を把握しているものと推測された。

加えて，現状の個別の教育支援計画は，実際には，計画の原案を教師が考え，本人や保護者の同意

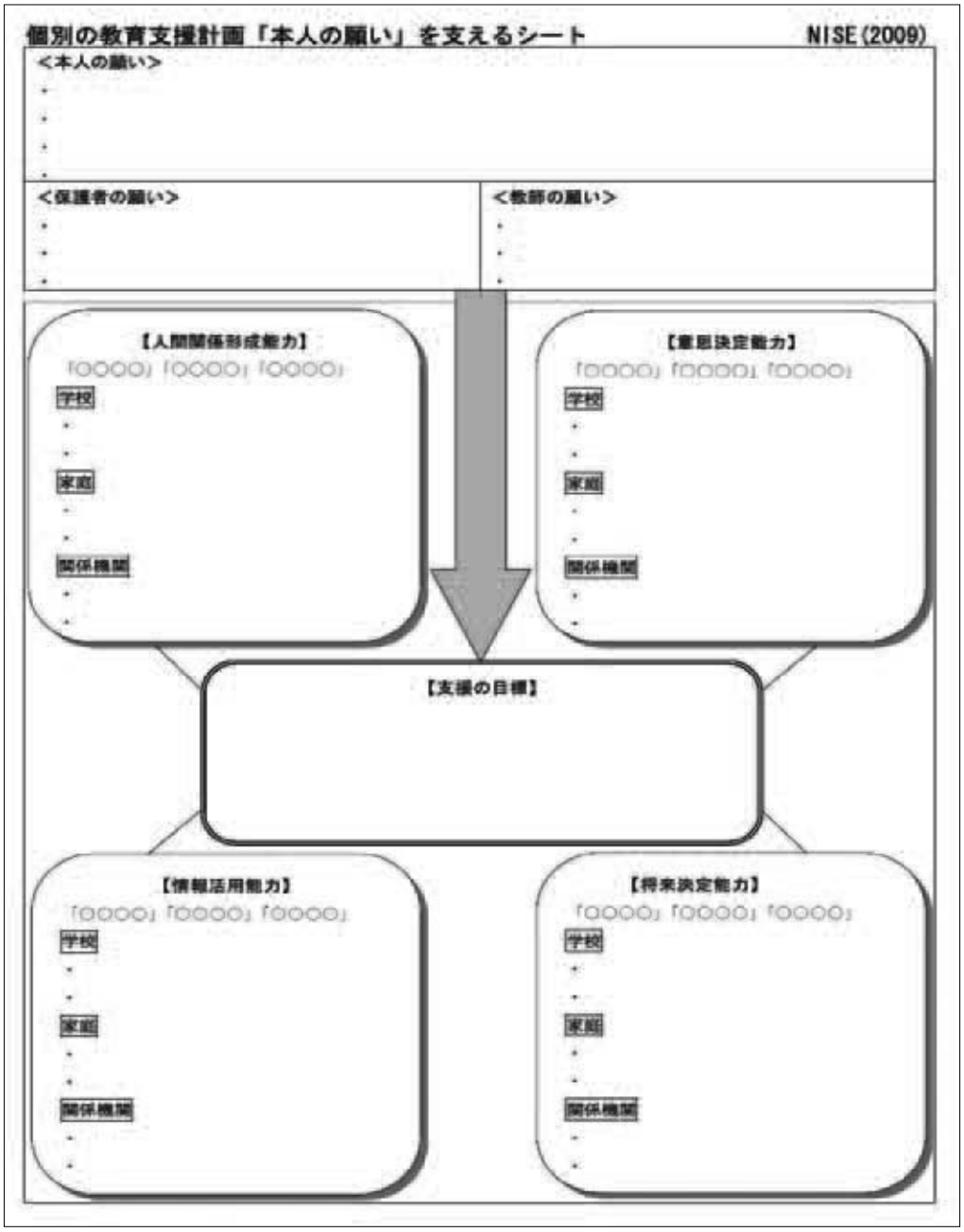


図１ 本人の願いを支えるシート

を得ながら作成されている現状があることも，このような課題を生じさせる原因の一つではないかと考えた。

以上のことを踏まえ，「本人の願い」欄の意味ある活用の仕方と，障害の程度や音声言語の有無に影響されない「本人の願い」の把握の方法とツールの開発が必要と考えた。

そこで，まずは「本人の願いを支えるシート」（図1）の様式を開発し，現状の個別の教育支援計画における「本人の願い」欄を活用する方法を考案した。

Ⅲ．「本人の願いを支えるシート」の概要及び作成手順

1．「本人の願いを支えるシート」の概要

個別の教育支援計画における「本人の願いを支えるシート」は，できるだけ作成者の作業の負担にならぬよう配慮し，各学校が作成している個別の教育支援計画から「願い」部分を転記することとし，それぞれの学校で作成している個別の教育支援計画にこのシートを挟み込む形で使用することを想定した。

前述のとおり，「本人の願いを支えるシート」を考案した目的は，「本人の願い」は本人のキャリア発達の中核をなすものであることと，個別の教育支援計画を「本人の願い」を重視した実際的な支援が実施できる，言わば血の通った支援が実施できるものにすることにある。

「本人の願いを支えるシート」では，よりキャリア発達への支援を学校や家庭，関係機関が明確化して実施するために，「本人の願い」から組み立てられた個別の支援目標を，「キャリア発達段階・内容表（試案）」（2008）の能力領域や各観点に分類するとともに，その分類の中で，学校や家庭，関係機関が実施する支援の目標・内容について記入できるように工夫した。

2．「本人の願いを支えるシート」の記入手順

「本人の願いを支えるシート」を作成するにあたって，キャリア発達の視点から「本人の願い」を支えることを認識し，個別の教育支援計画を作成するための記入手順（図2）を作成した。

以下にその手順を示す。

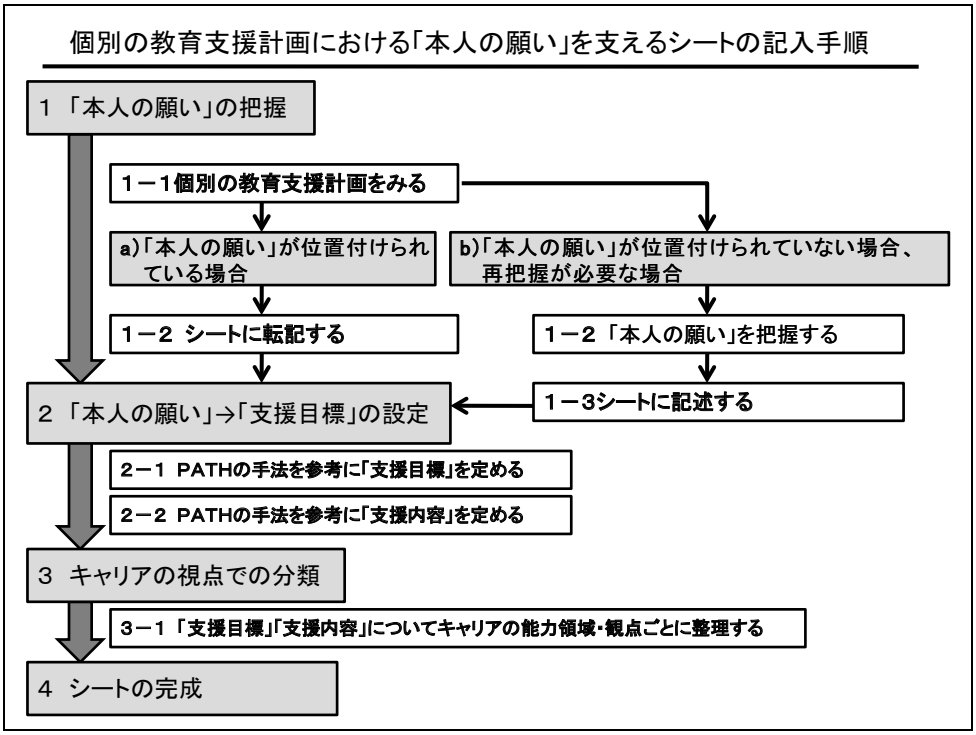


図２　個別の教育支援計画における「本人の願いを支えるシート」記入の手順

（1）「本人の願い」の把握

1）「本人の願い」を把握するときの留意事項

まずは，個別の教育支援計画の中に「本人の願い」が位置付けられ，把握されているのかを確認する必要がある。また，位置付けられている場合も，キャリア教育の視点から，以下のことについて確認する必要がある。

1点目は，「本人の願い」を把握しているかどうかということである。個別の教育支援計画の中で「本人の願い」欄が設けられていない場合もある。その場合には「本人の願い」は何なのか，本人不在の支援が行われていないか等のことを改めて考え直す必要がある。

2点目は，「本人の願い」はいつの時点のもので，いつぐらいまでをめざしているのかということである。その願いを本人が表明したのは，また個別の教育支援計画作成者が把握したのはいつの時点なのか，今現在とのズレが生じていないか等を改めて考え直す必要がある。また，「本人の願い」がかなう時期はいつを目指しているのか，1ヶ月後なのか，1年後なのか，成人した時のことなのかについて等，改めて確認する必要がある。

3点目は，「本人の願い」は具体的に記入されているかということである。「本人の願い」の規模や実現性，その願いの背景になっている本人の思いについて再確認することが必要である。「将来，ウルトラマンになりたい」，「将来，立派な大人になりたい」等の「本人の願い」があったとするならば，本人が何故，ウルトラマンになりたいと思っているのか，どんな立派な大人になりたいと考えているのかを導き出す必要がある。本人が発した言葉の背景にある意味も含めて十分考える必要がある。

4点目として，「本人の願い」の把握をライフキャリアの視点から考えているのかということである。

本人がこれから歩む人生における様々な役割について，「本人の願い」が捉えられているのかを考えていく必要がある。

2）本人，保護者，教師の願いの把握方法

ここで「本人の願いを支えるシート」における，「本人の願い」欄，「保護者の願い」欄，「教師の願い欄」の記入について確認する。

個別の教育支援計画の中に「本人の願い」欄が位置付けられている場合には，願いシートにその旨を転記する。しかし，「本人の願い」欄が位置付けられずにいたり，例え位置付けられていても本人に表出言語がない等の理由により記入されていなかったり，「本人の願い」が記入されていても再把握が必要だったりする場合には，改めて「本人の願い」を把握する必要がある。

このように，「本人の願い」をいかに引き出すか，またそれをどのように育み，支援していくのかを考えることが大切である。

また，この欄の記入にあたっては，以下のことに留意して記入することとした。

「本人の願い」欄については，①本人が現在思い抱いている将来の「願い」を記入すること，②この欄に記述する「願い」は，本人の将来における夢，希望，未来の種，ビジョン等，本人が人生において大切にしたいことを記入すること。

「保護者の願い」欄については，①保護者も支援者の一人であることを忘れないこと。具体的には，保護者の願いは，本人・保護者の願いと一緒に表現されることも多いが，基本的には本人と保護者の願いは違うことを押さえること。②この欄には，保護者が現在思い抱いている「願い」を本人の「願い」と関連付けて記入すること。

「教師の願い」欄については，教師として（あるいは学校として）現在思い抱いている「願い」を本人の「願い」と関連付けて記入する。

個別の教育支援計画に「本人の願い」が位置付けられている場合には，記入されているものを願いシートに転記する。この場合には，前述した個別の教育支援計画における「本人の願い」を確認する視点を忘れず，それらを考慮して転記することが大切である。

3）「本人の願い」を改めて把握する方法

「本人の願い」が位置付けられていない場合や再把握が必要な場合は，「本人の願い」を改めて把握する方法として，本人へのインタビューや直接「願い」欄に記入してもらうことで「本人の願い」を把握する。また，菊地（2010）も述べているように，ドリームカード等（図3）を使用して把握する方法

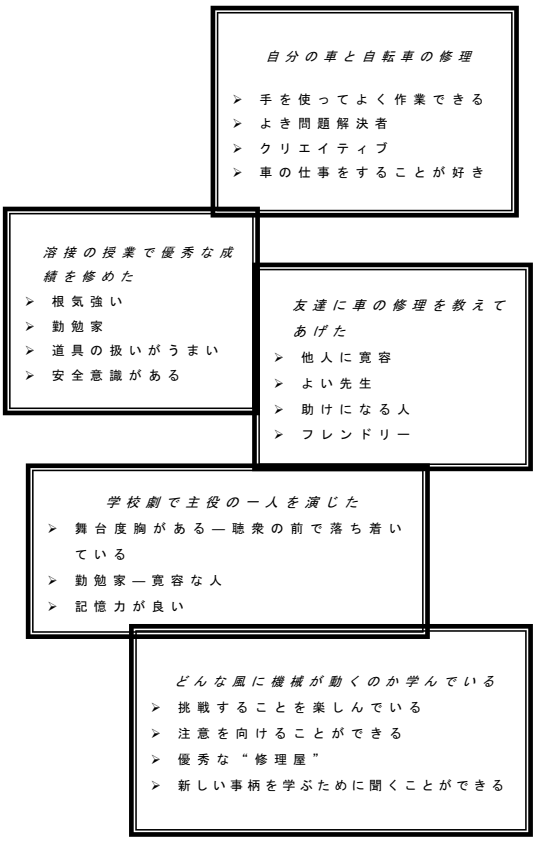


図３　ドリームカードの例

も有効である。

本人へのインタビューの項目例としては，「将来何になりたいですか？」，「将来どのような仕事につきたいですか？」，「将来どのような生活がしたいでか？」，「○年生までにどんなことがしたいですか？」等，具体的に聞く必要がある。

次に，表出言語がないなど，本人から「願い」を直接聞き出せない場合には，本人と直接かかわりの深い人達でブレーンストーミング（BS）やブレーンラティング（BW）を行い，「本人の願い」を予測し，把握することが考えられる。

なお，「本人の願い」を把握するに当たっては，次のことについて留意する必要がある。

第１点目に，本人と直接かかわりの深い人達から，本人の好きなことや趣向性等をあげてもらい，そこから本人の最も願っている（かなえたい）ことを予想して記入すること，第２点目に，本人の良さ，長所等を複数の人で考え，出し合って記入すること，第３点目に，ライフキャリアの視点から，本人のいろいろな役割の可能性について考えて記入することである。

このように，表出言語の有無にかかわらず，個別の教育支援計画を検証しながら，「本人の願い」欄を記入することとした。

(2)「本人の願い」から「支援目標」の設定

次に，「本人の願い」から，それを実現するための支援目標を立てる必要がある。願いシートにおける「支援目標」欄には，以下の項目を記載する。

第１点目に，この欄には，「本人の願い」を受け，学校，家庭，関係機関等の人達で支援の目標を考え，記入する。ここでは，「本人の願い」を受け，本人と関係の深い支援者が複数の目で検討して「支援目標」を決めていくことが大切である。

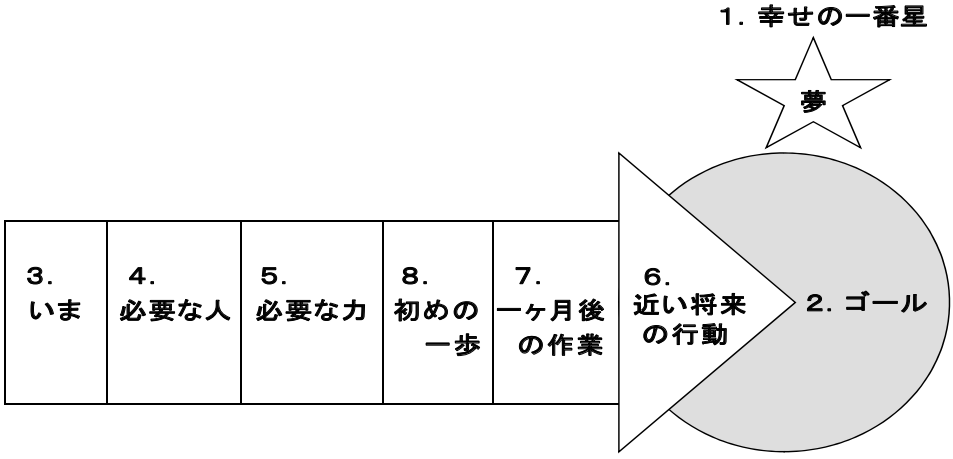
なお，「本人の願い」から「支援目標」を決めていくときには，Pearpoint, O'Brien, & Forest（1993）が提唱した，PATH（Planning Alternative Tomorrows with Hope：希望に満ちたもう一つの未来の計画，以下PATHとする）の手法等を取り入れることにより，支援の在り方が明確になると考えた。（図4）

第２点目に，支援目標の記入にあたっては，「本人の願い」を支えるための支援目標を設定する。このシートは「本人の願いを支えるシート」であるため，「本人の願い」を支えるためにはどうしたら良いのかを重視して支援目標を設定していく必要がある。

第３点目に，この欄の支援目標は，現在から各学部の最終学年の３月末までを目指した支援目標を記述する。ここでは，各学部を移動することを「移行（Transition）」と考えると，現在所属している学部の最終学年が一つの大きな節目となり，そこを目指して支援目標を立案することとした。

1）支援目標を定める

前述したとおり，「支援目標」を決めていく過程には，PATHの手法が有効であると考える。なぜなら，「本人の願い」を支える支援方法について，本人を含む本人と関係の深い支援者同士が話し合いを通して出てきた意見を整理し，支援目標を立案することによって，参加者自身が明日からどのような支援をすべきなのかが明確になり，かつ，参加者がお



STEP1：幸せの一番星（夢）にふれる
STEP2：ゴールを設定する，感じる
STEP3：いまに根ざす（私や私たちは今どこの位置にいるのか）
STEP4：夢をかなえるために誰を必要とするのか
STEP5：必要な力（どのような力を増したらよいのか）
STEP6：近い将来の行動を図示する
STEP7：一ヶ月後の作業を計画する
STEP8：はじめの一歩を踏み出す。

図４　PATH(Planning Alternative Tomorrow with Hope)の概要図
(Pearpoint,O’Brein,& Forest(2001)；和訳，涌井（2009）
を参考に筆者が作成)

互いに全体的な支援目標・内容について共有できるからである。以下に，PATH の手法を参考にした，「本人の願いを支えるシート」記入方法について述べる。

最初に，Pearpoint et al.（1993）の PATH の手法でも述べられている，本人にとっての「幸せの一番星」は何かについて，本人を含む本人と関係の深い支援者で考えていく。この部分は，PATH でいう STEP 1 の部分で，前述した BS や BW によって抽出された「本人の願い」を記入する。

次に，各学部の最終学年の３月末を目指したゴールを設定する（STEP 2)。ゴールの設定にあたっては，「幸せの一番星」に関連したものを記入する。ゴールを明確にするためにゴールに到達する年月日を記入する。そのときに対象児童生徒が「幸せの一番星」である夢に向かって何をしているのか，何を感じているのかを話し合って記入する。話し合い及び記入内容は，「本人の願いを支える」という視点から，「願い」を支える肯定的なものが望ましい。

ゴールの設定ができたら，「本人の願いを支えるシート」の支援目標欄に，対象児童生徒がゴールの状態になるためにはどのような支援を行う必要があるのかを考え，支援目標を記入する。

2）支援内容を定める

「本人の願いを支えるシート」の支援目標が決まったら，対象児童生徒の今現在の状況を記入す

る（STEP 3）。具体的には，はじめにシートを記入した日の年月日を記入し，次に本人の現在の状況，実態，対象児童生徒がどのように感じているのか等について話し合いをしながら記入する。

現在の状況や実態を記入した後，次に，ゴールの達成を目指して，必要な力や必要な力を増す方法を記入する（STEP 4）。本来のPATHでは先に「夢をかなえるために誰を必要とするか」が記入されるが，研究協力機関が独自に試行した意見から，実態とゴールを比べて「最初に必要な力は何か」について話し合いをした方が具体的なイメージを持ちやすいと考え，この部分の順序を変えた。

次に，「必要な力，必要な力を増す方法」を記入し，そのために「誰を必要とするか」について記入する（STEP 5）。ここでは，必要な力に関連した関係者や支援者をリストアップする。

（3）キャリア教育の視点で「支援目標」を分類する

ここでは，キャリア教育の視点から支援目標を分類する。すなわち，STEP 4で出された「必要な力」を，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所平成18・19年度課題別研究報告書「知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究」（2008）で考案した「キャリア発達段階・内容表（試案）」における4つの能力領域に分類し，STEP 5で出された「願い」の実現のために必要とする人を合わせて，願いシートの4つの能力領域の記入欄に記入するという作業を行う。

また，分類するにあたっては，次のことに留意することとする。①支援目標であげられた項目やSTEP4の必要な力として出された項目に対して，「キャリア発達段階・内容表（試案）」の能力領域に関係する目標がある場合，分類して領域名を記入する。②必ずしも，支援目標の全てをキャリア発達段階・内容表（試案）における能力領域に分類できなくてもかまわない。その場合には，記入しないで支援目標欄に残しておく。③「キャリア発達段階・内容表（試案）」における能力領域に偏りがあってもかまわない。

（4）「本人の願いを支えるシート」を活用した，実際の支援の在り方を考える

関係者をリストアップ後，次のステップへ進む。ここからは，記入した願いシートを実際に活用した支援の在り方を考えるステップとなる。

はじめに，ゴールの左隣の「近い将来の行動の図示」の部分に記入する。具体的には，近い将来，ここでは半年後を想定し，年月日を記入する。その時の対象児童生徒の目指す姿を記入する（STEP 6）。次に，「1ヵ月後の作業」として，本人ならびに支援者は何をする必要があるのかを話し合って記録する（STEP 7）。1ヵ月後の年月日を記入後に，それぞれの人が何をいつするかについて記述する。最後に，「はじめの一歩」として，この話し合いを終えて，明日，本人ならびに支援者は何をすべきかを各自が表明する（STEP 8）。

これら一連の作業を通して，「本人の願いを支えるシート」の支援目標，支援内容を考え，さらに願いシートを活用した実際の支援の在り方を考えるところまでを提案し，個別の教育支援計画の中にあるキャリア教育の中核である「本人の願い」をしっかりと位置付けるとともに，それを支え，そのための支援の充実を願うものである。

Ⅳ．「本人の願いを支えるシート」を作成するためのワークショップ

1．目的

「本人の願いを支えるシート」の記入ワークを通して，実際に「本人の願い」をとらえ，支援の在り方について確認することを目的とする。

2．方法

○日　時：平成22年1月8日（金）　15:30 ～ 17:30
○場　所：A特別支援学校　会議室
○参加者：小学部担当教員ならびに小学部主事，計8名
○進行役：大崎（国立特別支援教育総合研究所主任研究員）
○記　録：柴田・渡部（平成21年度研究研修員）

前述した「本人の願いを支えるシート」の作成手

順に従って，「本人の願いを支えるシート」を作成する。対象児童生徒は小学部Ｂ君とした。

３．ワークショップの経過

（1）事前準備

個別の教育支援計画の「本人の願い」欄を確認し，「本人の願いを支えるシート」の「本人の願い」「保護者の願い」「教師の願い」欄をあらかじめ記入することとした。（図５）

Ａ特別支援学校では，個別の教育支援計画に「本人の願い」欄を設けていなかったため，あらかじめ，担任がＢ君と話す中で「本人の願い」を聞き出した。本人からは，パソコンが好きであることや，中学部へ進学してからの期待感等が述べられた。それを参考に担任が「本人の願い」欄に記入した。以下は，Ｂ君の「本人の願い」欄に記述されたものである。

＜本人の願い＞
- 「かっこいい」中学生になることを楽しみにしている。
- 将来はパソコンを使った仕事に就きたいと思っている。
- たくさんの人と話をして楽しみたい。

また，保護者からは，個別の教育支援計画の作成時や電話で話をする中で，「保護者の願い」欄を記入した。近い未来を想定して記入している。以下は，「保護者の願い」欄である。

＜保護者の願い＞
- 路線バスによる通学ができるようになってほしい。
- 買い物ができるようになってほしい。
- 行動範囲を拡げてほしい。
- 本人の能力を活かす職についてほしい。

さらに，担任教師は，個別の指導計画の年間目標を参考に「教師の願い」を記入した。

＜教師の願い＞
- 路線バスによる通学ができるようになってほしい。
- 買い物ができるようになってほしい。
- 行動範囲を拡げてほしい。
- 本人の能力を活かす職に就いてほしい。

（2）ワークショップの流れの説明

「本人の願いを支えるシート」を作成するためのワークショップをすすめるにあたって，進行役から「本人の願いを支えるシート」の全体像を示し，ワークショップの流れについて説明を行った。

（3）PATH の手法を用いた実際のワーク

PATH の手法を用いて実際のワークを行った。はじめに，机上の模造紙に「幸せの一番星」をはじめ「ゴール」とそこに到達するまでのプロセス等，PATH の図を記入した。（写真１）

写真１

１）STEP １：幸せの一番星（願い）を決める

PATH の手法を用いて，最初に「本人の願い」を中心に，対象児童にとっての「幸せの一番星」は何かをワークショップの参加者がそれぞれ思い描いた。

次に，ブレーンライティングの手法を参考に，参加者各自が付箋紙にそれぞれ対象児童にとっての「幸せの一番星」を記入した。そして，記入したものを参加者が発表し合い，それを集約して最終的な「幸せの一番星」を決めた。一番星を決めるまでには 15 分くらいの時間を必要した。ここでは，参加者が小学部担当の教師集団だったためか，遠い将来を考えることにかなり悩む様子がうかがわれた。

参加者が「幸せの一番星」を決めていく過程で，

＜本人の願い＞

・「かっこいい」中学生になることを楽しみにしている。
・将来は、パソコンを使った仕事に就きたいと思っている。
・たくさんの人と話をして楽しみたい。

＜保護者の願い＞

・路線バスによる通学、通勤ができるようになってほしい
・買い物ができるようになってほしい。
・行動範囲を拡げたい。
・本人の能力を活かす職に就いてほしい。

＜教師の願い＞

・身辺処理等、時間内に自分のできることを増やす。
・できないことを依頼したり、自分の思いを相手に伝えたりできるようになってほしい。
・今やるべきことに集中して取り組む力を身につけてほしい。

【人間関係形成能力】

学校
・知的に高い集団の中で学習できるようにする。
・年齢が意識できるよう働きかけを工夫し，本人が場にあった言動をとり，技術獲得ができるようにする。

家庭

関係機関

【意思決定能力】

学校
・自分で考えてできる。
・適切な身だしなみに自分で気づき，整えることができるようにする。

家庭

関係機関

【支援の目標】

・パソコンの操作技術の取得と向上を目指す。
・謙虚に（自ら努力し，一生懸命）学ぶ姿勢と意欲をもつ。
・身だしなみを整える。

【情報活用能力】

学校
・パソコンを使って自分で文字を入力したり，調べたりすることができるようにする。
・パソコン室に行き，一緒に文字入力の練習をし，絵や写真の挿入の仕方を教える。
・身近なところでパソコンを使える環境を作る。
・決められた時間，集中して，学習，作業に取り組むことができる。

家庭

関係機関

【将来決定能力】

学校
・決められた時間，集中して，学習，作業に取り組むことができる。

家庭

関係機関

※A特別支援学校の演習では、学校の支援内容部分のみワークを行い記入した。家庭及び関係機関については空欄となっている。

図５　Ａ校における「本人の願いを支えるシート」記入例

対象児童がパソコンに興味を持っていることを活かして，最初は「パソコンを使った仕事」が「幸せの一番星」であるという意見が出されたが，「幸せの一番星」のところに記述する事項は，「夢でも良いのではないか。」という意見が出されて，最終的には「幸せの一番星」に「グラフィック･デザイナー」と記述することに決まった。

2) STEP ２：ゴールを設定する・感じる（３年後の姿）

同様に，PATH の手法を用いて，今から３年後の姿をゴールとして設定し，その時の年月日を記入した。次に，STEP 1 と同様に参加者各自が付箋紙にそれぞれ対象児童について，「3 年後の姿」を思い浮かべて記入した。その結果，参加者から「パソコンのスキルアップ」，「デジカメが使える」，「自分のパソコンを持つ」，「取材活動をする」等の意見が出された。それらを集約して，対象児童の３年後のゴールを設定した。

具体的には，2013 年 3 月 31 日に，「パソコンの操作技術の取得と向上」，「自分のパソコンを持つ」，「謙虚に学ぶ姿勢（意欲）」，「身だしなみ（を整える）」等の意見に集約され，ゴールとして設定した。

今から３年後の姿を想像してゴールを設定したが，話し合いの集団が小学部担当の教師集団であったため，またゴールの設定期間が３年という短い期間のために，「謙虚に学ぶ姿勢」や「身だしなみ」等，どちらかというと，指導した結果の対象児童生徒のあるべき姿がイメージされるような意見も出された。最初は，緊張した雰囲気だったが，STEP 2 まで進むと参加者も慣れてきたのか，対象児童の将来の姿を語り合うことで，次第に会話が弾むようになってきた。

3) STEP ３：今，現在の様子や姿（対象児童の実態）

模造紙の一番左のところに，今日の日付を記入した。そして，ゴールを目指すときに，今，現在の対象児童がどのような様子や実態なのかを STEP 1, 2 と同じ方法で決めていった。

出された意見として，「毎日パソコンをしている」，「挨拶ができる」，「（何でも聞きすぎるが）分からないことが聞ける」，「あきらめが早い」等の意見が出てきた。

進行役から，今，現在「できない」ことばかりに着目するのではなく，「できる」ことにも着目し，この欄に記入することが大切であることを伝えた。

具体的には，2010 年 1 月 8 日現在，「毎日インターネットをやっている」，「自分のイメージを持って作品づくりができる」，「あいさつができる」，「友達と遊ぶ」，「わからないことを聞ける」等の意見が出された。

4）STEP ４：必要な力

本来の PATH ならば，ここで，夢をかなえるためには誰が必要かの名前をあげるが，研究協力機関が先行して実施した試行の意見から，先に夢をかなえるために必要な人の名前をあげると参加者が混乱することが多かったため，今回は STEP 3 の今，現在の実態からゴールを目指すときに，どのような力が必要なのかを簡単な言葉で列挙してもらった。

その結果，「集中力」，「気力」，「体力」，「素直さ」，「根気強さ」，「大人に頼らないで自分で考える」，「金銭感覚」，「文字の理解」等意見があげられた。

5）STEP ５：誰を必要とするか（必要な人）

本来の PATH の STEP 4 と STEP 5 を入れ替えたため，ここでは夢をかなえるためには誰が必要かの名前をあげてもらった。ここでは，将来を見据えて，夢をかなえる人の名前をあげてもらうところだが，参加者が小学部担当の教師集団ということもあり，どちらかというとゴールを達成する（STEP 2）ために必要な人の名前が挙げられた。ワークショップ終了時間の関係で，ここでは，必要な力を参考にしながら，話し合いで誰を必要とするかを決めていった。

その結果，「情報教育担当の教師」，「保護者」，「OT（作業療法士）」，「ST（言語聴覚士）」等の名前があげられた。

6）STEP ６：近い将来（半年後）の姿

STEP 6 では，近い将来（ここでは半年後）の姿をイメージしてもらい，対象児童が半年後にどのようにあるべきなのかの姿をイメージしてもらった。

はじめに半年後の年月日を記入してもらった。その結果，参加者から「印刷班で学習」，「ハンカチを持つ」，「OT, ST の訓練に通う」，「学習にパソコンを使う」，「静音の文を作る」等の意見が出された。

ただし，対象児童は，半年後は学部を中学部に移行するため，ここで出された意見はあくまでも小学部の教師集団の意見であった。中学部で行っている生徒の活動については，大まかには理解しているが，詳細については知らなく，各自が知っている情報を共有しながら話し合う様子もみられた。

具体的には，2010年7月8日，「指を使った作業班でがんばる」，「ハンカチを使う」，「定期的にOT，STの訓練に通う」，「国・数でパソコンの学習をする→静音の文を見ながら入力できる」があげられた。

7）STEP 7：1ヵ月後にメンバー各々がすべきこと

STEP 7では，はじめに1ヵ月後の年月日を記入した。その後，ゴールの達成に向けて，参加者が1ヵ月後に何をすべきかについて，付箋紙に記入してそれらを取りまとめた。

具体的には，2010年2月8日，「休み時間には積極的に関わるようにして，友達，大人（教師）との関わり方を教える」，「パソコンのキーボードを家庭で用意して，必要な清音，文字を探してタッチする」，「エチケットを伝える（意識できるように）」，「中学生を意識」等の意見が出された。

8）STEP 8：はじめの1歩を踏み出す

STEP 8では，参加者が，明日，対象児童に何をしなければならないかをイメージし，一人一人が，対象児童に対して，明日どのような行動を起こすかについて表明した。（写真2）

その結果，「身だしなみの声かけをする」，「パソコンの仕事について調べる」，「目標を立てる」，「情報の先生へ話しに行く」，「学習の課題を作る」等の表明がなされた。

写真２

この部分と，STEP 7の部分が似ているので，参加者が少々戸惑う様子も見られた。しかし，参加者一人一人が，明日，何をするのかを表明することによって，それぞれがしなければならないことについて理解し，チームで共有できたことで大いに盛り上がった。

表明された意見は次のようなものである。「グラフィック・デザイナーとは何か，仕事は何かについて調べる」，「エチケットチェック」，「中学生に向けたがんばり目標をいっしょに立てる」，「昼休みに遊ぶ」，「パソコンを使って良いか，保護者に聞く」等

（4）PATHの完成図から「本人の願いを支えるシート」への記入

PATHの図を完成させた後，そこから「本人の願いを支えるシート」の「支援目標」欄を記入した。しかし，ゴールに向けての目標を立てるときにはPATHのどのSTEPを支援目標にするのかが難しく，参加者が悩む場面も見られたが，何とかまとめることができた。その結果，参加者から「身近なところでパソコンを使える環境を整える」，「知的に高い集団の中で学習できるように設定する」，「自分で考えて自分でできる」，「身だしなみに自分で気づいて整えることができるようにする」等の支援目標が立てられた。

さらに，参加者から出された様々な支援目標を「キャリア発達段階・内容表（試案）」における4つの能力領域に分類した（分類できないものは「その他」とした）（写真3）

【人間関係形成能力】
- 知的に高い集団の中で学習できるように設定する。
- 年齢を意識させる働きかけに努め，場にあった言動をとり，技術獲得ができるようにする。

【情報活用能力】
- パソコンを使って自分で文字を入力したり，調べたりすることができるようにする。
- パソコン室に行き，一緒に文字入力の練習をした

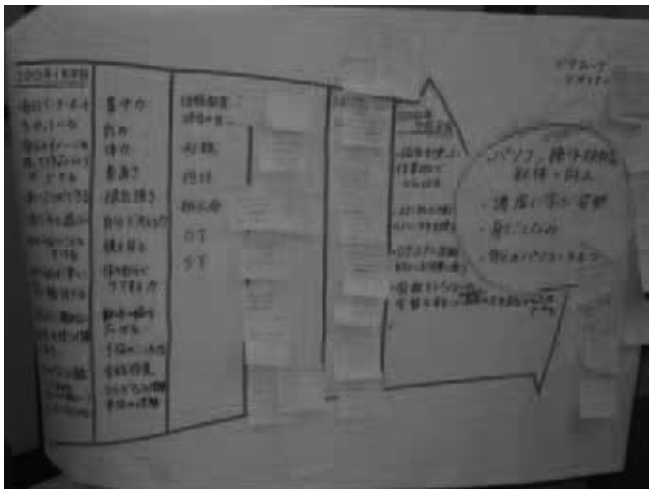


写真３　PATH の完成図
（※本来の PATH と記入内容等が若干異なり、アレンジして作成している）

り，絵や写真の挿入の仕方を教えたりする。
・身近なところでパソコンを使える環境を整える。

【将来設計能力】
・決められた時間，集中して，学習，作業に取り組むことができる。

【意思決定能力】
・自分で考えて自分でできる。
・適切な身だしなみに自分で気づき，整えることができるようにする。

【その他】
・ひらがなを修得（濁音・発音他を含め）する意欲を高める
・謙虚に（自ら努力し､一生懸命）学ぶために､様々な役割を与える。（責任感，自己肯定感等を育てる）

(5) ワークショップを終えての感想

実際に，「本人の願いを支えるシート」を記入するワークショップを終えて，このワークショップの参加者，見学者から次のような感想が出された。

・一番星を設定するのに時間がかかった。支援を誰がどうするかができた良かった。
・一番星の捉え方，たくさんの情報を持っていないとできないと思った。メンバーが偏っていた。多様な立場の人がいた方がよい。支援目標に何を書いて良いか迷った。
・願いが大切であることが分かった。多くの人の見方が必要だと思った。
・私たちは毎日見ている児童なのでイメージしやすいが，見方が偏っていたのではないか。過去に関わった人，保護者，中学部の教員などにも参加してほしい。
・一番星の考え方，つい現実的になってしまった。１年ぐらい先しか見ていなかったことに気づいた。
・みんなで意見を出すことができた。現実的なものができた。このワークは個別の教育支援計画というより，個別の指導計画になっていくと感じた。支援の目標を書くことに慣れていく必要がある。
・参加者の「はじめの一歩」を表明できたのが良かった。その１歩を３年後につなげられると良い。等

出された意見をまとめると，多くが「このワークショップに参加して良かった」という意見であり，理由としては，改めて「本人の願い」の大切さを知ることができたことを挙げている。

また，今後の検討事項として，「幸せの一番星」の引き出し方や PATH の完成図と「本人の願いを支えるシート」における「支援目標」の設定のつながりの明確化，一人一人の児童生徒にかける時間の課題，参加者の人選の課題等が出された。これらの課題への対応策として，「本人の願いを支えるシート」と PATH の STEP とのつながりを明確にし，分かりやすくする必要がある。例えば，STEP 2 は「ゴールを設定する」となっているが，「支援目標を設定する」という説明を加えることや，STEP 4 の「必要な力」で出された項目について，同時に「キャリア発達段階・内容表（試案）」における４つの能力領域に分類にすること等が考えられる。

また，今回の参加者は対象とした児童の小学部担当の教師集団ならびに学部主事だったこともあり，「幸せの一番星」には当初，個別の指導計画の目標のような，より現実的な課題が出される傾向が見られた。

「本人の願いを支えるシート」は個別の教育支援計画の中で使用することを目的としているので，小

学部の担任だけではなく，保護者，関係機関の職員等が参加する等，より現実に即した人選を工夫する必要がある。また，他学部の教員の参加も有効であると考える。

Ⅴ．総合考察

「本人の願いを支えるシート」の開発とA特別支援学校での試行を通して,「本人の願いを支えるシート」の作成および活用の意義についてあらためて以下のように考えた。

1．「本人の願い」を把握することの大切さ

1点目は,「本人の願い」を把握することの大切さである。その人の「キャリア」は，その人の価値観や自己決定，将来展望が大きく関係している。すなわち,「本人の願い」は，まさに「キャリア」の中核であると言える。個別の教育支援計画等で児童生徒を支援すると考えるならば，その主体である児童生徒本人の思いや願いなしでは，本当の意味での本人主体，本人中心の支援にはつながらないと考える。

2．個別の教育支援計画との組み合わせによる効果

2点目は,「本人の願いを支えるシート」を個別の教育支援計画と組み合わせて活用することにより,「本人の願い」を，支援する側も含めて改めて認識することができることである。

「本人の願いを支えるシート」を作成または，そのための話し合いに参加した人たちからは,「本人の願い」について考える機会になったと感想をいただいている。

また，これまで音声言語による表出が難しく,「本人の願い」の把握が難しかった児童生徒についても,「幸せの一番星」を目指すPATHの手法を取り入れることによって，改めて「本人の願い」の大切さや，その引き出し方に気付くことができることも大きな意義があるものと考える。

3．「本人の願い」への支援の共有化

3点目は，このシートを作成することによって，本人とかかわる周囲の人が「本人の願い」への支援を共に考えることができることにある。すなわち，今まで本人とかかわる，個人や機関がそれぞれ支援していたものが,「本人の願い」を中心に据え，連携・協力の下に支援できるようになる。

これまで，本人との関係においてそれぞれが支援してきたものが，全体を見渡し，包括的な支援ができるようになるというメリットがある。

4．キャリア教育における「本人の生き方」への支援の再考

4点目は,「本人の願い」を把握することによって，キャリア教育における「本人の生き方」への支援を改めて考えることができることである。前述したように，キャリア教育では,「主体である本人」の「生き方」への考え方が大きく関係していると言える。それぞれの人の自己実現を目指す「願い」を把握し，それを支えるための教育をどのように行うかについて考えるということは，3年後，10年後，それより先を見据えた，本人の「生き方」そのものへの支援を系統的に考えていくことにつながるものと考える。

5．「本人の生き方」を経年的にみていくことの重要性

5点目に，本人がその時代，時代において，どのように生きてきたか，すなわち，自らの生涯の中で様々な役割を果たす過程で，どこに自らの生き方に対する価値付け行ってきたかを「本人の願いを支えるシート」の積み重ねでみることができることにある。このシートを積み重ねることによって，本人が歩んできた「本人の生き方」の軌跡，本人の「キャリア」をみることができ，支援の在り方を改めて考えることにもつなげることができる。

このように,「本人の願いを支えるシート」の作成と活用により，真の意味での「本人の生き方」の支援につなげることが可能になると考える。

Ⅵ．おわりに

本稿では,「本人の願いを支えるシート」の開発と活用を通して，個別の教育支援計画における「本

人の願い」の把握と支援の充実を図り，その人のキャリアを支えるための方策を考えてきた。

個別の教育支援計画の中に「本人の願いを支えるシート」を活用することで，①「本人の願い」を基にした，ねらいや具体的な支援につなげることができること，②「本人の願いを支えるシート」の積み重ねによって本人が考えてきた，あるいは望んできた「願い」を経年的に考えることができる等のメリットが考えられる。

しかしながら，「本人の願いを支えるシート」を活用するにあたって，「児童生徒一人一人に対して行うとするならば時間がかかりすぎる」，「支援会議そのものが，まだできていない状態の中でどのように生かすのか」等の課題もあげられている。

今後は，「本人の願いを支えるシート」の更なる試行を通して，その活用のメリット，デメリット等を整理するとともに，個別の教育支援計画のみならず，個別の指導計画と組み合わせて使用することにより，より「本人主体」の支援の充実を図るための方策を検討することが望まれる。

引用文献

中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会（2010）．今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）．

菊地一文（2010）．ライフキャリアを踏まえた障害者の支援．職業リハビリテーション 23(2)，日本職業リハビリテーション学会誌．33-39.

国立特別支援教育総合研究所（2008）．知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究（平成 18･19 年度），課題別研究報告書.

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）．キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～.

Pearpoint, J., O'Brien, J., & Forest, M.（1993）. *Path: A workbook for planning positive, possible futures and planning alternative tomorrows with hope for school, organizations, business and families*. Toronto: Inclusion Press.

Super, D. E.（1980）. A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior, 16*, 282-298.

特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）．今後の特別支援教育在り方について（最終報告）.

涌井恵（2009）．本人中心アプローチによる障害のある子どもの支援の輪作りに関する事例報告―小学生への PATH（Planning Alternative Tomorrow with Hope）の実施．教育相談年報，30，1-6.

参考文献

北海道立特殊教育センター（2007）．保護者との連携を推進するために．平成 18 年度研究紀要，24-25.

干川隆・肥後祥治（2000）．パートナーシップの原動力としての夢：カナダにおける MAPS と PATH の紹介，障害児教育分野における協力・連携関係（パートナーシップ）の形成に関する調査研究，国立特殊教育総合研究所成果報告書．44-50.

Hoyt, K. B.（2005）．キャリア教育 - 歴史と未来（仙崎武・藤田晃之・三村隆男・下村英雄，訳）．社団法人雇用問題研究会．（Hoyt. K. B.（2005）．Career education: history and future. Tulsa, OK: National Career Development Association.）

木村宣孝（2008）．特別支援教育とキャリア教育．特別支援教育の実践情報，25（1），12-15.

木村宣孝（2009）．「キャリア発達」と「ライフキャリア」．特別支援教育研究，621，52-53.

木村宣孝（2009）．我が国におけるキャリア教育の位置づけと特別支援教育における意義，障害のある子どもへのキャリア教育．特別支援教育研究，620，41-42.

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）．児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）.

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2008）．「キャリア教育」資料集－文部科学省・国立教育政策研究所－研究・報告書・手引編.

松為信雄（2010）．自立と社会参加を目指したキャリア教育のあり方．肢体不自由教育，193，12-17.

文部科学省（2009）．特別支援学校教育要領・学習指導要領.
文部科学省（2009）．特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部･小学部･中学部）．教育出版.
文部科学省（2009）．特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）．教育出版.
文部科学省（2009）．特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）海文堂出版.
文部科学省（2006）．小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引.
森脇勤（2009）．キャリア発達の視点をふまえた職業教育・就労支援―デュアルシステムとキャリア教育の推進―．特別支援教育研究，626，52-53.
日本キャリア教育学会編(2008)．キャリア教育概説．東洋館出版社.
仙﨑武・藤田晃之・三村隆男・鹿嶋研之助・池場望・下村英雄（2008）．教育再生のためのグランド・レビューキャリア教育の系譜と展開．社団法人 雇用問題研究会.
渡辺美枝子（2007）．キャリアの心理学―キャリア支援の発達的アプローチ―．ナカニシヤ書房.
全国特別支援学校長会・全国特別支援学級設置学校長協会（2007）．小・中学校等における「個別の教育支援計画」の策定と活用.

(受稿年月日:2010年8月31日,受理年月日:2010年12月2日)

The Development and Implementation of an Easily Comprehensible Worksheet and the Support of "Student-initiated Expectations" of IEPs from the Perspective of Career Education

OSAKI Hirofumi

(Department of Teacher Training and Information)

Abstract: A worksheet based on student-initiated expectations was constructed to analyze the aims, content, that lie at the core of Career Education. Through trialing of the worksheet, the multidisciplinary team-working to address the needs of the child were in a position to accurately ascertain the expectations of the child, thereby developing an ideal method of meeting those needs. As a result, the importance of grasping "the expectations of the child" was reaffirmed in combination with an IEP. Furthermore, “the support” of student-initiated expectations were spread across many avenues of support, and careers were able to develop support for the “way of life of the child” in career education. An additional benefit of using the worksheet is that piling up of the work sheet enable supporters to think about the career of the person.

In future, the expectation is that person-centered support be improved through the sharing of student-initiated expectations by the multi-disciplinary team of people working with the child in the development of IEPs.

Key Words: career education, student-initiated expectation, IEP, PATH, person-centered